

# 秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成25年11月1日(第1234号)



発行/ (社) 秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306

## 国土交通省

### 優秀施工者国土交通大臣顕彰

#### 会員企業から2名が受賞

国土交通省は10月10日に2013年度優秀施工者国土交通大臣顕彰(建設マスター)の対象者379人を公表し、10月17日、東京都港区のメルパルクホールにおいて顕彰式典を行った。

建設マスターは、優秀な技能や技術を持ち、後進の指

導・育成に貢献した建設技能者を顕彰するもので、今回で1992年の創設以来22回目となる。

秋田県から5名が対象となり、その内、会員企業から2名が受賞した。

#### 【受賞者(会員企業)】

黒川和弘 (株)宮原組・大仙市

奈良正義 (株)大成工務店・大館市

## 協会

### 新規学卒入職者研修会(後期)を開催

#### 自己分析、コミュニケーションの基本について演習

県協会では、平成25年度新規学卒入職者(新入社員)後期研修会を10月3日、秋田ビューホテルにおいて開催した。研修会には、この春会員企業に採用された新入社員を対象にフォロー研修を実施したところ40名の参加となった。

研修会では、研修オリエンテーションとして、働くことの難しさ、一人前になるために何が大切か事例について意見交換し「仕事は主体性を持って取り組んでいくこと。苦手なこと(人、仕事)に対して何事もポジティブに取り組むことがいい結果も運も呼び込む。」ことを学んだ。自己SWOT分析ではグループに分かれ、S(自分の長所)W(自分の短所)O(職場環境のプラス側面)T(職場環境のマイナス側面)について、シート作成、グループ内発表、討議を行った。午後からは、コミュニケーションの基本、コミュニケーションの事例演習を実施。交渉力について講義が行われた。その中で、「コミュニケーションとは、情報を送り手と受け手が共有するものである」「責任

には『実行と結果』の二つがあり、それぞれ「ほう(報告)れん(連絡)そう(相談)とワンセットである。『ほうれんそう』は早く!要求される前に!マメに!悪い情報ほど早く報告する!叱責を恐れない!」ことを学習し、問題解決について事例により演習が行われた。



# 建設業労働災害防止全国大会

50回目・新潟市で開催

建設業労働災害防止協会(錢高一善会長)は10月10日と11日の二日間、全国建設業労働災害防止大会を開催し、全国から関係者約4,000名が参加した。

今回は「基本に戻って取り組む安全 全員参加でリスクの低減」がスローガン。

大会冒頭に挨拶した錢高会長は、減少傾向にあった建設死亡災害が昨年増加に転じたことなどに触れ、「建設投資の増加に比例して災害も増えることがないよう、安全衛生活動に全力で取り組む必要がある」と述べ、大会において労働災害防止のノウハウと情報を持ち帰って安全衛生活動に役立てよう、参加者に呼びかけた。

大会では、全国の支部から推薦された会員事業場及び個人

が表彰され、秋田県支部から推薦した8事業場、8個人が受賞した。

会場では、表彰式、講演会のほか、安全用品、作業用具などの展示会が行われ、メーカーによるデモンストレーションなどが実施された。

大会2日目は、部会毎による講演、講義を開催。厚生労働省による第5次労働災害防止計画の説明や企業による安全衛生への取り組み、研究成果などの発表が行われた。



## 受賞者(秋田県支部所属)

### 個人賞

#### 〔功労賞〕

佐藤 吉博 (株)佐藤建設 仙北分会  
 澤口美恵子 (株)オオタベ 北秋田分会  
 伊藤 幸八 (株)伊幸組 平鹿分会

#### 〔功績賞〕

與語 武美 小坂建設(株) 鹿角分会

### 優良賞

第一道路建設(株) 山本分会  
 (株)松永工務店 由利分会  
 (株)皆瀬土木 雄勝分会  
 伊藤工業(株) 秋田分会

## 秋田県労働災害防止団体連絡協議会

# 第50回 秋田産業安全衛生大会

建災防秋田県支部長賞に8事業所・8個人

秋田県労働災害防止団体連絡協議会は10月2日、第50回秋田産業安全衛生大会を開催し、県内産業の関係者約300名が参加した。

大会は建設業を含む県内産業において、安全衛生の取組などに功績の認められる事業所・個人を表彰するとともに、事例発表などを通じて、安全衛生意識の高揚と啓蒙を図る目的で開催してきた。

表彰式においては、26事業所及び25名が所属する労働災害防止団体から表彰され、建災防秋田県支部においては全県から建設業8事業所、8名が受賞した。



## 建設業労働災害防止協会秋田県支部長賞

### 1. 事業場賞(8事業場)

(株)小坂橋建設 (鹿角市)  
 (株)佐藤庫組 (北秋田市)  
 三熊興業(株) (能代市)  
 マルト建設(株) (潟上市)  
 (株)長谷部工務店 (由利本荘市)  
 (株)宮原組 (大仙市)  
 西田建設(株) (横手市)  
 山一建設(株) (湯沢市)

### 2. 個人賞(8名)

#### 〔功労賞〕

中村 勝利 (株)村木組 (鹿角市)  
 加賀谷栄治 秋田土建(株) (北秋田市)  
 小田嶋幸夫 伊藤建設工業(株) (横手市)  
 山脇 幹 (株)山脇組 (湯沢市)

#### 〔功績賞〕

石川 和雄 (株)石川組 (三種町)  
 齊藤 晃一 (株)齊藤組 (由利本荘市)  
 鬼川 慈郎 佐藤建設(株) (仙北市)

#### 〔職長賞〕

石岡 幸二 加賀伊土建(株) (秋田市)

# 秋田・鉄 路の情景

Vol.  
13

## 「夜行列車の終焉」

JR秋田駅



文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター  
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、  
ベンチャー・リンク、癒、ある他  
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル  
写真塾・写楽 主宰／写真教室、撮影ツアー  
企画等

いつかはこういう日が来ることは分かっていたけれども、ついに、寝台特急「あけぼの」が来春のダイヤ改正で廃止になるようだ。これで秋田県内の駅を発着する夜行列車は消滅する。

廃止を惜しむ声があちこちから上がっているが、これも時代の流れというものだろう。考えてみれば夜行列車というのは、ひと昔前の“かけがえのない長距離移動手段”であった。筆者も東京で学生生活を送っていた十三年前には、夜行列車の急行「津軽」などをもっぱら愛用して秋田と東京を往復していた。あのころの上野駅は夜になると、東北、上越、北陸方面に向かう夜行列車が何本も出ていて、一日のうちで一番にぎわっていたのではなかったろうか。

時代が移ろい、新幹線や空の便、高速バスなど、早くて快適あるいはより安価な移動手段に事欠かない今となつては、夜行列車はその使命を終えたということか。

夜の間に移動したければ夜行バスがあるし、午前中に都内に入りたいのであれば飛行機の早い便でたいは間に合う。企業経営の世界でよく言われる「選択と集中」に沿って考えるならば、鉄道会社としては、もはや“売れ筋商品”とは言いがたい夜行列車は廃番にして、長距離については新幹線を使ってもらいたいということなのだろう。

夜行列車の消滅は時代のすう勢でやむを得ないことであるのだけれども、それにつけても惜しいのは、あの夜行列車ならではの“旅情”を、もう二度と味わえないということだ。

秋田を発着する最後の夜行列車となる寝台特急「あけぼの」は、秋田駅から羽越本線を南下し、新津、長岡を経て、上越国境を越えて高崎経由で上野に向かう。夜中にふと目覚めて窓の外をうかがった時の、人々の寝静まった見知らぬ町の情景。しらじらと夜も明けて少しずつ都会らしくなっていく車窓からの眺め。終着近く、名残りを惜しむかのような車掌の車内放送。それらはまさに、“旅情”あるいは“旅愁”そのものだ。

廃止になる前にせめてもう一度だけ「あけぼの」に乗っておかないと、なんだか悔いを残してしまいそうだ。

## 隠れキリシタンの道

藤原優太郎

藩政時代、キリスト教信者は耶蘇教の邪宗門徒とされ、厳しい弾圧と処刑を受けた。幕府や各藩の執拗な追跡をのがれ、各地で多くの殉教者が出た。ある者は地下に潜行し、隠れキリシタンとしてその信仰を篤くした。

仙台藩の水沢(岩手県)に後藤寿庵という切支丹がいた。本名を岩淵又五郎といい、若い頃、長崎でキリスト教の洗礼を受け、五島列島にいたことから五島(後藤)の性を名乗ったという。のちに支倉常長の口添えて仙台藩の伊達政宗に抱えられ1200石取りとなって水沢の見分村(福原)に本拠を置いた。

後藤寿庵は奥羽地方切支丹の総帥といわれるほど当時、禁教とされたキリスト教を広めることに腐心した。伊達政宗の信任は厚かったのだが、元和9年(1623)頃、幕府の命令でますます禁教取締りが厳しくなって、寿庵は水沢福原から逃れざるを得なくなった。

当時、寿庵のもとに身を寄せていたポルトガル生まれのデイゴ・デ・カルバリヨという宣教師がいた。かれは久保田城の大奥にまで布教した人であるが、やがて弾圧の手を逃れ、下嵐江(おろせ・奥州市胆沢区)の鉾山に身を隠した。しかし、ついに捕えられたあと、仙台北下の広瀬川原で処刑された。(パジェス『日本切支丹宗門視史』)

下嵐江鉾山は洪民金山といわれ、非常に繁盛し小屋が千軒もあって仙台藩の重要な鉾山であった。洪民に限らず、当時の鉾山は捕縛の十手が入らない、つまり治外法権がたてまえて、そこで切支丹たちは宣教師の助言などもあり、各地山奥の鉾山に逃げ込んだ。秋田では院内銀山が切支丹の隠れ場、逃亡先となっていた。

伊達政宗の詮索に耐えきれなくなった寿庵は、福原を捨て、南部(岩手)あるいは秋田領に逃げたとされているが、たしかなことは分らない。

後藤寿庵が住んだという館跡が福原公園となって水沢に残されている。そこには後に建てられた寿庵廟や福原小路という屋敷通りもある。

後藤寿庵は胆沢川の水を水沢平野に引き込む水利事業を手がけ、のちに「寿庵堰」といわれる巨大な水路を作り上げた。その用水路は今に残っている。ちなみに胆沢川といえば焼石岳を源とする河川で、流域にすればまさに命の流れであった。今は巨大な胆沢ダムが完成しようとしている。

話を前に戻そう。

寿庵は徹底した切支丹で、仙台藩重臣の石母田大膳から棄教を進められたものの、それを拒んで領外に脱出したとされ

ている。逃亡経路はいまだ不明とされており、仙台の石母田家文書からは南部(岩手県)方面に逃れたとされているが、それは必ずしも確証があるわけでもない。

さまざまな歴史的事象を考えると、(自分の)推論では胆沢区下嵐江から仙北道(柏峠)という剣難の山道を通って秋田領に逃げ込んだのではないかということになる。福原を棄て、地下に潜行した寿庵は11名の切支丹と一緒にだったといわれる。

増田村(横手市)居住の小原縫殿之助から秋田藩重臣の梅津政景に届いた願い上げ書状に、次のような一文があるという。「先年、梅津憲忠に願って、仙台水沢に居住の旧友たちが秋田領に来て新田を開発し、機会をみて足軽並みに勤仕するよう取り計らったが許可になったから11人を移して新田112石8斗8升5合分を開発する」。梅津氏の取り成しで佐竹義宣から黒印(許可)を貰っている。

水沢からの11人は偶然の一致といえどもそれまでだが、取り成しをした秋田藩家老の梅津憲忠の妻は角館キリシタンの娘であったというから、何かの情報操作があったものではないだろうかと思われる。とにかく秋田藩武士の中に相当の切支丹がいたことは間違いない。

同時代、キリシタンと関係があるのかは不明だが、横手市の天仙寺に「岩瀬御台」の霊廟がある。

岩瀬御台は久保田に移封された佐竹義宣の側室となった人で、のちに離縁されて横手で一生を過ごした方である。生まれは伊達政宗に摺上原の戦で滅ぼされた芦名家である。遺児となったその後、須賀川の二階堂家で育てられたが、その二階堂氏も政宗に滅ぼされ、岩城家に移ったあと佐竹義宣の側室となった。

天仙寺の隣に春光寺があり、そこに岩瀬御台の位牌が残されている。詳しくは書かないが、春光寺もまたキリシタンと深い関係をもつところである。

武藤鉄城の『秋田切支丹研究』の中の横手の項に、「寛永元年(1624)の冬、南部下嵐江の山中で捕えられ、仙台で斬殺された外人宣教師カルバリヨは横手へも赴く意図を有していた。

義宣側室の岩瀬御台が離縁されたのは禁教関係ではなかったかと想像されている。春光寺には岩瀬御台の位牌が安置されているが、また木刻で高さ1尺ほどの油絵具風の塗物で彩色したマリア像とされるものがある。禁教の隠ぺいが目的か、頭部左右と前面が削り取られている。

一人一人の歴史が別々に残されているが、藩政初期、隠れキリシタンとなった同時代人が地下で深くかかわっていたというのは言い過ぎだろうか。